

「今、私の晴雨計は！④④」

「私たちはどう生きるか」

平山征夫

昨年夏、発売された「漫画君

たちはどう生きるか」という教養

型の漫画が珍しく大ベストセラ

ーになり、今年の初めに百万部を

超えた後も売れ行きは落ちず、一

年近くになる現在も店頭が目立

つところに積まれている。私も昨

年10月に古町の本屋で買って読

んだ。何より懐かしかった。そし

て感動した。吉野源三郎がこの本

を初出したのは昭和12年、戦争

に向って日本全体が高揚してゆ

く時代に、山本有三が編纂者だっ

た「日本少国民文庫」の最終刊と

して出版された。当初山本自身が

執筆する予定だったが、体調不調

で代わって吉野が執筆した。中学

生の時読んだと思うが記憶は定

かではない。今、読み返して「あ

の時代によくこれだけ良心的な

本を出版したものだ」と痛感した。

この本は、戦後語彙を平易にし

て出版され、息長く児童文学の古

典として読まれてきたが、今回は

漫画版が出版され大ベストセラ

ーとなった。一般的に本が売れな

いと言われる今の時代に起こっ

た奇跡のような現象だ。現に私の

この随筆を「本にしたら」と薦め

てくれる人もおり、地元新聞社系

の事業社に持ちかけたところ、

「出版事業は本が売れないので

原則自費出版しか扱いません」と

のことだったが、提示されたその

条件も、以前朝日出版から「私は

こんな知事になりたかった」とい

う本を出版した時に比べあまり

に悪く、結局思いとどまってしま

った。だからこの本が「どうして

こんなに売れているのか」を巡っ

て議論もされているが、その理由

を私も知りたい。「どう生きるか」

という「人間にとつて最も基本的

な課題を考える人が多いから」な

ら良いのだが……。

私は、中高生時代、この本のほ

かに下村胡人の「次郎物語」や山

本有三の「路傍の石」、「真実一路」、

高校生になってからは井上靖の

「あすなる物語」、「しろばんば」

などを次々に読んだ。それらから

も多くの影響を受けた。併せてこ

れら原作とした映画も見ている。

だから受けた影響は本と映画が

相俟ったものなのだろうが、いず

れにしる私の人格形成（大したこ

とはないのだが……）になが

しか影響したことは確かだ。

今回の漫画版も良くできている。

主人公の15歳コペル君とおじさ

んの人間や人生を考えるやり取

りをまとめた「ノート」もそのま

ま掲載されている。友人達との学

校生活でさまざまな経験をしな

がら成長してゆく姿を中心に描

いたものだが、半世紀以上を経て

も不変の問題提起で古さは一切

感じない。73歳でもう一度読み

返す（但し漫画で）とは思わな

ったが、わが人生を振り返って大

いに教えられるところがあつた。

特に「人間は自分で自分の人生を

決められるのだ」というメッセージは強く残った。残りは僅かだがそうしようと心に決めた。

私が中高生時代に読んだと挙げた本は、「教養小説」というジャンルに属するものだということは成人になってから知った。教養小説というのは「主人公などの成長を小説にすることで、人間の生き方などを描く小説」と定義されるものだ。だからコペル君こと潤一君や本田次郎、岡田吾一、梶鮎太の少年期から始まって色々な事件等に遭遇しながら成長し、人格形成してゆく姿が描かれる。その少年時代編を同じ少年の頃本で読み、映画で見てわが事のよりに感動したのだ。私の少年期より時代的には遡るものが多かった。

だが、それだけにまだ貧しさの中で生きてゆく少年の健気さや困難が常に感動として伝わってきた。

教養小説はドイツで盛んだったジャンル、その代表作はゲーテの「ウィルヘルム・マイスター」、トーマス・マン「魔の山」、ケラー「緑のハイブリッヒ」ロマン・ローラン（仏）「ジャン・クリストフ」などだが、日本の数少ない教養小説をほぼ読んでいる割には、西洋のものはあまり読んでいないことに気付いた。どうしてそうなったのだろうか。内外一体として教養小説という括りは全くしていなかったせいだろうか。日本には結局あまり教養小説が根付かなかったと言われているが、戦争

を挟んだせいだろうか、など考えていたら「ああ、現在進行形の教養小説？がある」ことに思い付いた。

五木寛之の「青春の門」だ。太平洋戦争の真只中、九州・筑豊に生を受けた「伊吹信介」が故郷を後に上京し、演劇活動や学生運動など色々な経験を経て成長する姿を同郷の牧織江と絡めながら描いた長編小説だ。「週刊現代」に連載が始まったのが昭和44年、第8部「風雲篇」の連載が終わったのが平成6年だから25年間にわたる断続的連載だった。主人公信介が過ごした時代がほぼ私と同じということもあり自分の青春と重ねながら夢中で読んだ。その「青春の門」が昨年23年ぶり

に「新・青春の門」として連載再開となった時は正直驚いた。五木さんは80歳代半ばになっているだけではなく、近年の執筆や話

（よくラジオなどに出る）の大半は宗教や終活などが多いからだ。「親鸞」や「百寺巡礼」「余命 これからの時間をいかに豊かに生きるか」などを執筆、「老後は登山に例えれば下山だが、下山を上手にすることが大切」などと説いていたから、「青春の門」の再執筆は予想出来なかった。読みたいと思ったが、「週刊現代」を毎週買うかどうか躊躇していたら、問題は思わぬところから解決された。毎朝、大学まで送り迎えしてくれるハイヤーの運転手さんが同様青春の門のファンで、

かつこの週刊誌を以前から愛読していた。私はそれを借りて「新・

青春の門」を読み始めた。時代設定は現代ではなくて昭和30年代後半、だから信介はそれほど変わっていない。しばらく信介がシベリアを舞台に登場していたが、途中から織江の歌手としての話に移った。何よりもイライラしたの話があまりにも進まない。このペースでは五木さんは百歳まで連載する気なのかと思ってしまふ。3月末で、学長を辞したのを機にハイヤーでの送迎がなくなり、新・青春の門の週刊誌での購読は終わった。あの進み具合なら単行本になってからまとめて読んで遅くはないと思った。

伊吹信介と牧織江の成長を描い

ているので立派な教養小説かと思つたら、青春の門の解説には

「大河小説」と書かれ、山岡荘八の「徳川家康」や中里介山の「大菩薩峠」と比較されていた。そういえば対談で五木さんが「早稲田大学の先輩尾崎士郎の「人生劇場」を手本にした」と述べていたのを思い出した。これらはやはり教養小説というより大河小説と言つたほうがびつたりなのだろう。今回のこの本の大ベストセラーを眺めながら「今の子供たちに必要な新たな教養小説が待たれていないのかもしれない」と感じた。それにしても週刊誌を買って読む習慣のない私には、「袋とじ」というヌード写真のページは初めてだったが実に悩ましかった。